

限られた領域に納まっていた自然(コロナウィルス)が今、世界中に広がり、人間とは共存しえない。コダマのような時間差で、奴隷制度の病根が残っていた米国で格差撤廃運動が起り、世界と響き合い、日本でもデモが行われている。この山麓でも予兆のような微振動を感じ、祈りつつ答えを探している。

「わたしが奴隷たちの言い分を聞かず、はしための権利を拒んだことは、決してない(ヨブ 31:13)。わたしを胎内に造ってくださった方が彼らをお造りになり、我々は同じ方によって母の胎に置かれたのだから(31:15)」。

奴隷を当然とする社会で、神の創造に立脚して人間の格差を乗り越えているヨブ。奴隷制度の消滅まで唱えずとも、両者共倒れになるより、この告白だけでも充分意味はあろう。

「同じ方によって母の胎に置かれた」人間が、「神が裁きに立たれるとき、何をなしえよう(31:14)」と神に全面降伏するのは自然な応答。ヨブがこう語る時、私たちは「アーメン、その通り」と応じる。だが神の明るさを讃えておしまいでなく、敬虔な人間に不条理を与える暗がりへも踏み込みたい。

「ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた(1:1)」。  
こうした生き方を手本にしたいキリスト者は少なくない。とはいえ、ヨブは筆舌に尽くしがたい苦難に遭い、三人の友との激しい対話で、混乱や葛藤、生の不条理がこれでもかというほど露わになる。

29章ではかつての満ち足りた幸福が述べられ、30章では現在の苦痛が脚色なしに表される。二つの章の極端な違いを示し、続く31章ではその段差を使ってジャンプし、己の潔白を神に訴える。

「わたしを胎内に造ってくださった方が彼らをお造りになり、我々は同じ方によって母の胎に置かれたのだから(31:15)」とはその通りなのだが、はたしてこれは謙遜なのか。それとも自らの潔白を盾にして神の「見誤り」に文句つけているのか。後者だ。

神は「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸(統治する策)を暗くするとは(38:2)」と答え、延々叱責する(38~39章)。なぜなら、いくらヨブが聡明で公平であろうとも(31:13~15)、病根は模範的な生を絶好の隠れ家にするからだ。

正しい人が陥る袋小路、良心と誠実さの限界。世界中で起っている人権行動が鈍化し、人間の運動が疲れても、御言葉の響きは衰えることはない。

ヨブのように高潔であっても、人間に格差をつける病根は依然残っている。だが病根は、力ある御言葉によってやがて引っこ抜かれるだろう。

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだから(ガラテヤ 3:28)」。「我々は同じ方によって母の胎に置かれた(ヨブ 31:15)」が、それが分かるだけでは神の国を見ることができない(ヨハネ 3:3)。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれた神の子なのだ(ガラテヤ 3:26)」。キリストと結ばれた神の子として「在る」。私たちは信仰による神の子だから、人と人の間に格差のない神の国を生きる。

神の国を見、そこに生き、死にさえも捉えられない神の国に新しく生まれる。私たちはヨブの敬虔には到底及ばないが、新たに生まれて人間の敬虔を超えていく。

言い換えれば、キリストに結ばれてキリストを着る(3:27)。「死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになる(1コリント 15:53)」のだ。



#### 《おまけのひとこと》

奴隷という歴史の残滓が格差を生じさせるのではない 格差を求める人間の病根が 病根に合う民族や歴史を仕立てるのだ 病根に足乗せている人間には引っこ抜けまい 信仰はそれを抜く段取り